The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第9章　現代日本社会の「同性愛歓迎ムード」に潜む差別の危険性 ： マイクロアグレッション概念を鍵として
Author(s)	元山, 琴菜
Citation	フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想. 2022, p. 116-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88604
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代日本社会の「同性愛歓迎ムード」に潜む差別の危険性
――マイクロアグレッション概念を鍵として――

元　山　琴　菜

（北陸先端科学技術大学院大学
グローバルコミュニケーションセンター講師）

牟田和恵 編　フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想　第９章
ISBN 978-4-87974-779-2　C3836

第9章　現代日本社会の「同性愛歓迎ムード」に潜む差別の危険性
――マイクロアグレッション概念を鍵として――

元　山　琴　菜

1. はじめに：「多様性」に舵を切る日本社会に潜む差別

日本では1970年代から非異性愛者を含む性的少数者（以下、セクシュアルマイノリティ）による活動が見られ、1984年には国際レズビアン・ゲイ協会（ILGA）の日本支部が「IGA日本（1987年以降、ILGA日本）」として発足、1990年代に入ると、ゲイカルチャーが取り上げられるなど「ゲイブーム」が起きたとされる（McLelland 2005）。世界保健機構（WHO）が1990年に、国際疾病分類の改定で同性愛を精神障害の分類から外し[1)]、その後日本精神神経学会でも1995年に同性愛を精神障害とみなさないという見解を明らかにした。2000年以降、世界的に同性婚の合法化やパートナーシップ法が制定され、いわゆる「先進国」で議論が進まない日本は世界から「遅れ」をとっているとの危機感がもたれたこと、電通が火付け役となった「LGBTブーム」により大企業がセクシュアルマイノリティの権利を守る取り組みを始めたこと、さらに、その流れに沿って渋谷区を筆頭に多くの自治体によって同性パートナーシップ制度が導入されたことなど、それらがきっかけとなり、セクシュアルマイノリティへの理解や尊重の重要性がより強く顕在化してきた。さらに、2021年3月に同性カップル3組が争った裁判では、札幌地方裁判所が、非異性愛が「人の意思によって選択・変更し得ない性的指向の差異でしかなく」、非異性愛者が「婚姻によって生じる法的効果の一部ですらもこれを享受する法的手段が提供されて」いないのは、「憲法14条1項に違反すると認めるのが相当である」との判決を下し、同性婚の法制度化に向けて大きな一歩を踏み出したと言われるなど（『BBC News Japan』2021.3.17）、「同性愛歓迎ムード」を後押したといえるだろう。2019年に釜野さおり他によって実施された「セクシュアル・マイノリティをめぐる意識の変容と施策に関する研究」では、6割の人が同性婚を「賛成・やや賛成」とし、セクシュアルマイノリティに対するいじめや差別を禁止する法律や条例の制定に賛成する人は、どの世代でも7割を超えるなど（全体だと9割近く）、セクシュアルマイノリティへの制度的な支援を支持する人が増加していることもうかがい知れる（釜野ほか2020）。

だからと言って、非異性愛者が日々の暮らしの中で差別を経験していないことにはならない。非異性愛者に関する研究でも、自身の性的指向を開示することを指すカミングアウト（以下、カムアウト）をしたことで差別やいじめを経験した調査結果も報告されているように（日高2016; 厚生労働省2020）、非異性愛者は今もまだ暴力や暴言の的となる。SDGsをはじめとし、グローバルスタンダードの人権意識が日本社会にも導入されつつあることや、日本でも東京オリンピック・パラリンピック開催を機に顕著に唱えられるようになった「多様性と調和」を目指す社会兆候からも、特に近年では、あからさまな人権侵害は国際的にもより強い批判の対象となってきた。しかし、このように暴力や暴言などホモフォビア[2)]（同性愛嫌悪）を丸出しにした悪意のある人によって行われる差別はよくないという認識が共有されることとなったとはいえ、まったく差別が解消されたとは言えない。その一つの表れと言えるのが、いわゆる「マイクロアグレッション」と呼ばれる、より見えづらく、捉えがたい差別である（Sue 2010=2020; Nadal 2013; キム 2019=2021）。マイクロアグレッションとは、「特定の個人に対して属する集団を理由に貶めるメッセージを発するちょっとした、日々のやり取り」（Sue 2010=2020: 20-1）であり、「加害者」自身が、自分の加害性に無自覚・無意識的であり、「けっして意識的に差別など働かないという自己認識を持った人々」によって行われるという特徴をもつ。こういった日常的な言葉にしづらい差別経験は、あからさまな差別よりも被差別者のエネルギーを費やさせ、心身の負担を強いる、という指摘もある（Sue 2010=2020; Nadal 2013）。

そこで本稿では、「多様性と調和」への舵切りをし、「同性愛歓迎ムード」が醸成される現代日本社会を、マイクロ

アグレッション概念を通して批判的に検討する。本稿の狙いは、その批判的検討を通して、日本で「見せかけの人権意識」が出来上がっていること、そして、それ自体が差別の再生産につながる危険性を孕んでいることを可視化し、マイクロアグレッション概念を起点とした多様性尊重社会の可能性について示唆することである。

以下の通り本稿を進めていく。まず 2 節では、マイクロアグレッション概念に関する整理を行い、3 節では非異性愛者が日常的に経験する「ホモフォビア」や「差別」とははっきりと言えないような捉えがたい差別経験の実態を明らかにしていく。4 節では、筆者が非異性愛者やその家族への抑圧の原因の一つとして挙げた「和規範」を紹介しつつ、それとマイクロアグレッションとの関係性を検証することを通して、同性婚や非異性愛者に「寛容」だと認識する人が陥りうるマイクロアグレッション加害の危険性を可視化し、現代日本社会がマイクロアグレッションの温床になっていることを指摘する。最後に、5 節では、マイクロアグレッション概念の可能性について述べる。

2. マイクロアグレッションとその形態

マイクロアグレッションという言葉は、アフリカ系米国人への差別の在り方として 1970 年に米国の精神医学者であるチェスター・ピアスによって提唱されたが、その後 2000 年代に心理学者のデラルド・ウィング・スーによってマイクロアグレッションに関する研究が発展していった。スー（2010=2020）は、人種、ジェンダー、性的指向に対するマイクロアグレッションの形式を三つに分類している。それらは、マイクロアサルト（Microassaults）、マイクロインサルト（Microinsults）、マイクロインバリデーション（Microinvalidations）である。これらのマイクロアグレッションは、言語や行動を通して表現される場合だけでなく、環境の中に隠されたメッセージとして伝えられる場合もあることから、必ずしも人と人との間で起きるものではないとされる。

図 1 は、スー（2010=2020）の人種的マイクロアグレッションのカテゴリーと関係図をもとに筆者が作成した、マイクロアグレッションの形態とそのメッセージをまとめたものである。マイクロアサルトは、相手を「脅すことや威圧する」こと、意図的に相手を傷つけることを目的としており、周縁化された人々に意識的かつ意図的に伝えら

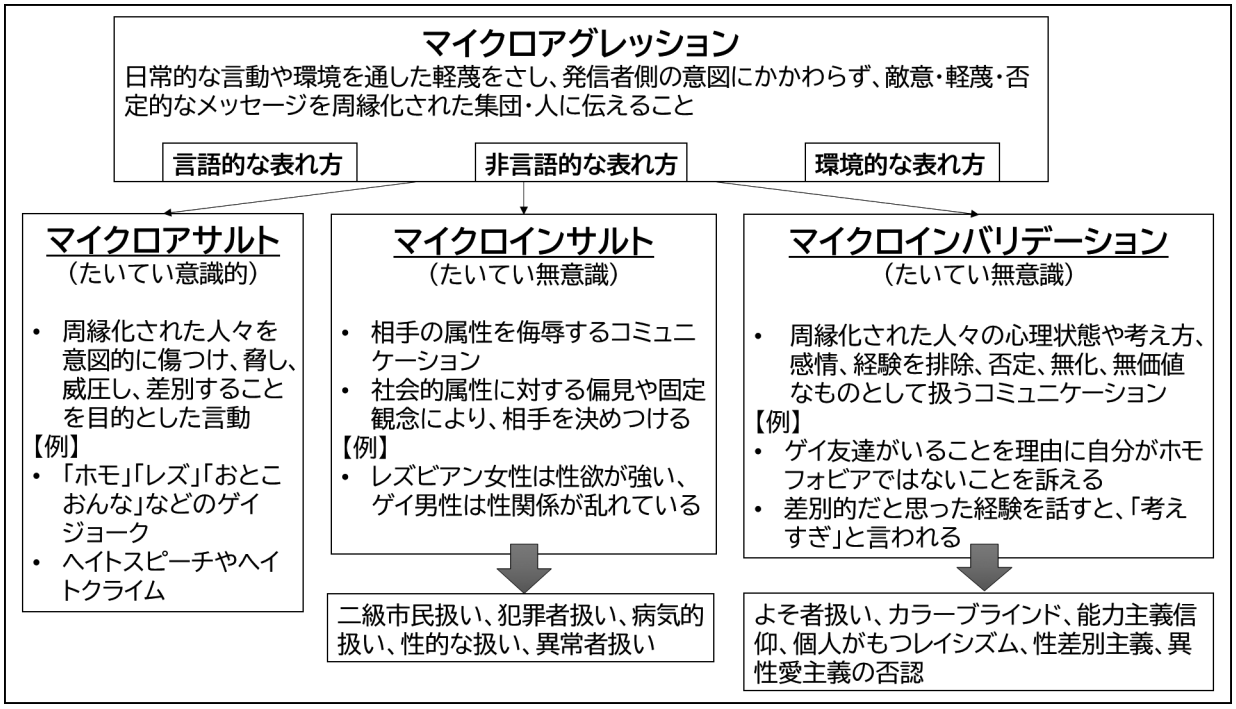

図 1　マイクロアグレッションの形態とそのメッセージ（スー（2010=2020:70）の「人種的マイクロアグレッションのカテゴリーと関係図」を元に筆者加筆・作成）

れる偏った態度や信念、言動を指し、その度合いは問わない（Ibid: 69）。「ホモ」、「レズ」、「おとこおんな」など、非異性愛者に対して発される差別的な言葉や、ゲイジョークで笑いを取ろうとすることはこれに含まれる。しかし、近年こうした意識的かつ意図的な差別行動は社会的な批判の的となることが多いことから、加害者の匿名性が確保でき、同様の考えを持つ者同士の「安全」な場で、自制心を失ったときに見られる行為だと位置づけられる。

次に、マイクロインサルトとは、相手の属性を侮辱するコミュニケーションを指し、一般的には加害者が無意識的かつ無自覚に行っているという特徴を持つ。社会的属性に対する偏見や固定観念に基づいて相手を決めつける言動がこれに該当し、二級市民扱い、犯罪者扱い、病気的扱い、性的な扱い、そして、異常者扱いするメッセージを伝え、周縁化された人々への差別を正当化する。例えば、レズビアン女性は性欲が強いといった決めつけや、ゲイ男性は性関係が乱れており HIV やエイズと疑われること、バイセクシュアルの人が同時に二人以上に好意を抱くと考えられていることなどがあげられる。女性の身体が性的に客体化される場合も、マイクロインサルトに分類される。

最後に、マイクロインバリデーションとは、「特定のグループの人々の心の動きや感情、経験的なリアリティなどを無視したり、否定したり、無価値なものとして扱ったりするコミュニケーションや環境の中のサイン」を指し、加害者は無自覚であることが多い（Ibid: 78）。スーはこれを、周縁化された属性やその属性を持つ人自身を否定する「抑圧の究極形」（ibid: 79）とし、受け取り側（以下、受信者側）にとって最もダメージの大きいマイクロアグレッションの形であると指摘する。米国で生まれ育ったアジア系米国人に対して何度も出身地を確認することはこの一例であり、米国で育った経験を否定し、よそ者であることを伝えるメッセージとして解釈できる。ほかにも、有色人種の人がレストランでのサービスの悪さを白人に伝えたところ、「考えすぎ」と言われることも、人種に関する経験を無化するメッセージとして解釈できる（金 2016）。他にも、カムアウトした相手が、ゲイの友人がいることを理由に自分がホモフォビアはないことを主張することもマイクロインバリデーションの一例である。このような言動は、誰もが偏見や固定観念からは自由になれないにも関わらず、自身が差別的な発言をしたり無意識の偏見を持っていたりすることを否認し、差別を無効化してしまう。

マイクロアサルトは、より露骨な攻撃であることから、受信者側も差別の実態に気づきやすく、対応の有無やその方法について考えやすいとされる。他方で、マイクロインサルトとマイクロインバリデーションは、相手が無自覚で無意識であること、また、相手への差別的メッセージが環境の中に埋め込まれていることから、受信者も即座に差別だと判断しづらい。このように、マイクロアグレッション概念は、捉えづらい抑圧と無自覚な加害性を可視化するために提唱されたと言える。

3. 非異性愛者を取りまくマイクロアグレッション

本節では、筆者がこれまで非異性愛者とその家族への聞き取り調査および当事者やその家族の支援団体における参与観察をもとに収集した経験から、マイクロアグレッションの事例を紹介する。わたしたちの生活に潜むマイクロアグレッションを顕在化するために、非異性愛者への偏見がいかに社会で共有されているのかという考察に加え、特に、友人や家族など身近な人たちの間で見られるマイクロアグレッションの事例を中心に描き、マイクロアグレッションが起きる原因とその背景にある不均衡な社会構造を明らかにしていく。

3.1 メディアや社会に遍在する偏見：笑いとからかいの中で

筆者が 2010 年に実施したインタビューの協力者（以下、協力者）24 名のうち、半数近くは自身の性的指向を受け容れるのに苦労した経験を話してくれた。このような非異性愛者がホモフォビアを内面化してしまう背景には、メディアや家庭、学校や日常生活のいたるところで、非異性愛者への偏見が満ち溢れているからである。例えば、協力者の一人が、これまで自身が見聞きした差別的な言動について、「保毛尾田保毛男（ほもおだ　ほもお）」というキャラクターが流行っていて、友達がそのキャラクターについて楽しそうに話している姿をみて、到底周りには自

分の性的指向を打ち明けられないと感じたと話してくれた。このキャラクターは、約 30 年前の人気テレビのキャラクターであり、お笑い芸人が露骨な青髭とピンクの頬を強調したメイクをし、「ホモ」という言葉と共に笑いを取ろうとすることで知られている。それが、2017 年にフジテレビ記念特番で放送され、すぐに批判の対象となった。フジテレビは謝罪したが、それが 30 年後の現在許容されるコンテンツだという認識があったことは、男性非異性愛者への偏見を助長し、「気持ち悪い」「嘲笑してもよい」存在として非異性愛者への差別に加担する行為として理解できる。このようなメディアによって歪曲されたイメージの表出は、マイクロアサルトともとれるが、「お笑い」として消費し、ステレオタイプを助長している点はマイクロインサルトと捉えることもできるだろう。

非異性愛者への歪曲されたイメージは、メディアのみならず、家庭内、学校や職場でも同じにように消費される。家族と一緒にテレビを見ていて、女装家や非異性愛の描写に対して、親が笑ったり、「頭がおかしい」といった発言をしたりするのを聞いて、絶対に親にはカムアウトできないと思ったと話す協力者もいた。この発言は、非異性愛者を異常者扱いし、非異性愛が排除されることを正当化するマイクロインサルトであると言えるだろう。

学校や職場でも非異性愛者へのからかいは生じている。2018 年に大阪市民を対象とした釜野らの調査[3)] によると（釜野ほか 2019）、小学校から高校時代に、「ホモ」「レズ」「おとこおんな」という言葉で不快な冗談やからかい・暴力行為を受けたことがある人の割合は、7.3%（不快な冗談やからかい）・1.2%（暴力行為）おり、それらを見聞きした経験に至っては、40.2%（不快な冗談やからかい）・11.8%（暴力行為）に達する。大人になってから身近な人から不快な冗談やからかいを受けた経験がある人･暴力的行為を経験したことのある人は 2.6%（不快な冗談やからかい）･0.5%（暴力行為）だが、それらを見聞きした経験は、17.7%（不快な冗談やからかい）･6%（暴力行為）となっている。大阪市での調査結果を必ずしも一般化できないが、これらの調査結果は、学校や職場における交友関係の中で、非異性愛者を揶揄する発言が環境の中に今も埋め込まれていることを示唆している。実際に、協力者の中には、職場の飲み会の場で男性同士が仲良くしていることに対して、ゲイを疑い、からあう場面に遭遇したことがあった人もいた。その協力者によると、「ゲイジョーク」は、普段の職場では聞かれないのに、飲み会の場であると許される雰囲気があると言う。プロフェッショナルとされる職場はゲイジョークを言うべき場ではないと認識されているが、飲み会では、「おもしろいゲイジョーク」は許容されると認識されていることがうかがい知れる。このような非異性愛者をからかう発言や暴力自体はマイクロアサルトとして理解できるが、そういった環境を通して発せられるメッセージは、異性愛者でないと、ひどい目に合うという恐怖心を人々に植え付けており、マイクロインサルトとも捉えられる。

以上のような、非異性愛者へのからかいは、当事者への認識をゆがめるだけでなく、非異性愛者に対する既存の固定観念を助長することにもなる。それは､非異性愛者自身がそれらの偏見を内面化することとも密接に関わっている。協力者が LGBTQ+ コミュニティにアクセスし、当事者の人たちと交流した際、「みんなが親切に受け容れてくれたので、レズビアンであることは間違っていないのだ」と話す人がいたように、ロールモデルとなる人がおらず、異性愛者が描く LGBTQ+ のイメージを内面化するあまり、自身の性的指向を肯定的に受け容れられない状況がつくられている。このように、偏見を社会で許容し、カムアウトできない環境をつくりだしていることは、マイクロインバリデーションとも捉えられるだろう。

3.2 家族や友人、職場の人との何気ない会話の中で

異性愛を前提とした日常会話の中にもマイクロアグレッションは潜んでいる。例えば、友人や職場の人と私生活の話をする場面では、女性に対しては、「彼氏いるの？」、男性に対しては、「彼女いるの？」が一貫して使われており、異性愛ではないという選択肢を相手に与えない。協力者の女性の中には、学生時代の女友達との恋愛話に乗り遅れないようにと、無理に彼氏を作った経験がある人もいた。他の協力者で、長年同性パートナーと一緒に暮らす女性は、職場で結婚の話をされ、男性パートナーと一緒に暮らしていると周りに偽り、話を合わせているという。そうすると、「長年付き合っているのに、結婚してくれないなんてひどい男性だ」と、お節介まで焼かれたと笑っていた。このよ

うな異性愛を前提とした会話は、非異性愛を不可視化し、存在しないように扱うことを意味し、マイクロインバリデーションと捉えることもできるのではないだろうか。

異性愛を前提とした会話は家庭内でも頻繁に繰り広げられる。親や家族とは恋愛の話をほとんどしない協力者でも、働き始めて数年たつと、結婚しないのかと親から問われたり、「孫の顔を見せてほしい」と親・祖父母から言われたりする経験をもつ人がほとんどであった。こういった発言は、家族へのカムアウトを難しくさせていた。なぜなら、親・親族からの家族をもつことへの期待に応えられないことで、親を傷つけ、裏切る行為だと認識していたからである。そのため、カムアウトによって、これまでの良好な家族関係を壊すことを恐れ、真の自分を打ち明けられない協力者は多くいた。跡継ぎとして育てられる経験をもつ者は、家庭を持ち、家を次世代につなげ、家を守るという親・親族からの期待が強く、自身の性的指向を隠し、異性と結婚するしかないかもしれないと絶望的に話していた。跡継ぎへの期待は、結婚や家庭をもってこそ一人前、という考えが潜んでいるだろうが、ここで想定される「家族」とは、あくまで異性愛とその子から成る。このように異性愛家族を持つことへの期待やその期待に沿うよう仕向けることは、非異性愛者を無価値や未熟な存在として扱い、二級市民の扱いとも捉えることができることから、マイクロインバリデーションとマイクロインサルトの一例として理解することができるだろう。

結婚や子どもを持つことへの親や周りからの期待や異性を前提として展開される恋愛話は、一見「ありふれた」会話として認識されているかもしれない。これが「ありふれた」会話として認識されるのは、わたしたちが依然として異性愛間の性愛が規範であるという異性愛規範社会に住んでいるからである。異性愛を基準とする日常的な発言の背景には、「自分の周りにいるはずがない」といった決めつけから、そういった発言が誰かを傷つけるとは考えていない。しかし、「いないだろう」という思い込み自体が、非異性愛者の存在を完全に不可視化しており、あらゆる環境の中に埋め込まれるマイクロインサルトやマイクロインバリデーションの再生産に加担してしまう。このような思い込みは、2019 年に LGBT 総合研究所が実施した「LGBT 意識行動調査 2019」[4] の結果にも表れている。「あなたの身の回り（家族や友人）において、次に挙げる『LGBT・性的少数者』の方はいますか。（複数回答）」という質問に対して、83.9% が身の回りにはいないと回答している。しかし、同調査の事前調査によると、「いない」とされるセクシュアルマイノリティ（「性的指向および性同一性のいずれかにおいて少数者である」と答えた人）の割合は 10% をさし、そのうち、性的指向区分[5] において非異性愛者は 7% であった。つまり、異性愛規範社会において、非異性愛者は「いない」のではなく、「言えない」「見えない」と考えるのが適切であろう。

このような環境下では、カムアウトがより一層難しくなる。協力者の多くは、仲の良い友人や家族に、自身の性的指向を隠し、異性愛者とうそをつき続けることへの罪悪感も抱き、葛藤していた。そのため、カムアウトを「エゴ」だと話す協力者もいた。なぜなら、異性愛が「ふつう」の社会で、非異性愛者である自分を理解してほしいと思うことは、相手に多くを望みすぎだと考えているからであった。つまり非異性愛者は、カムアウトするか否かの真の選択肢をそもそも有していないといえる。カムアウトをエゴだと捉える発想自体に、非異性愛者たち自身が異性愛規範を内在化し、性的指向によって不公平な待遇を受けることはしょうがない、もしくは正当だといった考えが染みついていることを示している。このように、マイクロアグレッション概念を通して非異性愛者をとりまく環境を考察してみると、カムアウトし非異性愛者だと打ち明けてから差別的言動を浴びせられるというよりは、つねに差別を経験させられていることが明確に浮かび上がる。

インタビュー調査から 10 年以上経ち、LGBTQ+ を取り巻く環境は確かに変化している。しかし、LGBT 総合研究所が 2019 年に実施した、「LGBT に関する生活意識調査」[6] によると、78.8% の当事者が誰にもカムアウトしていない（LGBT 総合研究所 2019）。このことから、現在でも、自身の性的指向を受け容れたり、他者に打ち明けたりできる環境が整っているとは言えず、今でも非異性愛者は日常的に差別を経験していると理解することができるだろう。

3.3 カムアウトの歪曲

それでも他者に自身の性的指向を打ち明けた非異性愛者は、また異なる種類のマイクロアグレッションを経験する

ことになる。その一つに、カムアウト自体が歪曲化され、無価値なものとして扱われる経験がある。カムアウトした相手から、「（同性を好きなのは）まだ異性を知らないからじゃないか」とか「異性を経験したら変わるかもしれないから経験してみたら」などと言われた経験をもつ非異性愛者は少なくないだろう。その発言に「もやもや」を感じるのは、相手に悪気がないことにも起因しており、差別イコール暴力的でホモフォビアに満ち溢れたもの、と定義してしまっている場合には、なお「差別的」だとは認識しづらい。そもそも、異性愛者が異性を知り、経験したから異性愛者に「なった」とは考え難い。にもかかわらず、非異性愛者にその発想を押し付けることはダブルスタンダードであり、異性愛以外の性的指向はふつうではないから、「ふつう」に戻ったほうが理想的、という考えが背景にあるとも考えられる。このように視点に立てば、こういった悪気のない発言は、非異性愛の性的指向を「ふつうではない」と異常者扱いするマイクロインサルトとしても理解できるだろう。また、異性との経験が「ふつう」に戻るための手段だと思われていること自体、性的指向は本人の選択で、それゆえ差別されても仕方がない、という認識を前提としているようにも見える。このように、異性との経験で「ふつう」に戻れるというステレオタイプを押し付けることは、非異性愛を否定するメッセージを伝える。以上の例は、本人の意志を尊重せず、異性愛規範を押し付け、非異性愛者たちがそれに抗いながら、カムアウトに至る苦悩を無価値なものと扱っているとも言え、マイクロインバリデーションと捉えることもできるだろう。

他にも、カムアウト後、相手から「自分のことは好きにならないでね」や「襲わないでね」と冗談まじりに言われた経験のある非異性愛者もいる。そもそも、同性を好きになると言われて、自分も同性だから恋愛の対象になる、と考えること自体思い上がりだと言わざるを得ないが、こういった発言には、非異性愛者を性的なものや、性犯罪者という偏見が包含されている。性別に関わらず、相手の同意なしに性行動に至ることは、性犯罪である。また、冗談まじりに「本音」を伝えるそのコミュニケーションの背景には、非対称な関係性が潜む。キム・ジヘは（2021）、優越理論を参照しつつ、冗談を通して誰かを侮辱する背景には、その行為を通して自分が優れているという優越感を抱くためだと説明する。冗談やユーモアを通した発言は、発信者による「悪気はなかった」という言葉で済まされ、差別をなかったことにされる。しかし、差別的な「冗談」をただのユーモアとして捉える寛容的なその態度こそ、社会的に周縁化されている集団への排除と不可視化を助長する態度である（Ibid: 96）。

3.4 カムアウトの無化：「何も変わらない」

カムアウトをなかったことにされる経験もまたマイクロアグレッションの一例と言える。例えば、友人や家族にカムアウトしたにも関わらず、異性愛を前提とした会話が続けられることがある。レズビアン女性の協力者の中には、カムアウト後も、その相手から「まだ彼氏はつくらないの」と言われた経験を持つ人もいた。このように同性が好きだと言っている人に異性を勧めるのは、非異性愛を否定し、無価値なものとして扱うマイクロインバリデーションとして理解することができるだろう。

それ以外にも、カムアウトが「大したことのない」ように扱われるケースもある。友人にカムアウトして、「そうなんだ。友達にもいるよ」「好きになる相手が同性なだけだよね」などと言われて「もやもや」するのは、非異性愛に偏見がない態度から出てきていると認識できる一方で、非異性愛者として生きる上で直面するあらゆる問題が見過ごされる感覚になるからではないだろうか。確かに、非異性愛は、異性愛と同様に、性的指向の一つであるため、グラデーションの一つである。しかし、そんな「大したことのない」差異は、異性愛者が婚姻制度から得られるあらゆる特権を非異性愛者が享受できない事実をみても、実際には、あらゆる社会的弊害を抱えさせ、非異性愛者を社会保障の対象外として脆弱な立場に追いやっている。

カムアウトされた側の立場からすると、カムアウトをなかったことのようにしたり、「大したことのない」ように扱ったりしたのは、なんて言ってよいのかわからなかった、ということ以上に、これまでとは同じ態度で接することが相手への配慮だ、と考えたのかもしれない。近年では LGBTQ+ への知識が普及しつつあるため、大げさに反応することは失礼に値する、もしくは、知識がないと思われるのは恥ずかしい、という感情の裏返しの反応だったか

もしれない。ここでは、「以前とは変わらぬ態度」を取ることが、相手への気遣いと捉えられている。また、非異性愛者を「大したことがない」と扱う態度は、偏見のない態度としても理解できるだろう。実際に、このようなカムアウトの受け容れ方を積極的に評価する非異性愛者もいるだろう。しかし、「大したことない」という態度が、非異性愛者への差別自体を覆い隠し、無化してしまえば、その経験はマイクロインバリデーションとして理解できるのではないだろうか。また、「これまでと変わらない態度」が、「今まで異性愛規範を基に築かれていた関係を問い直さないという態度」だとすれば、非異性愛者が置かれている不平等な状況も温存されてしまうだろう。

3.5 自分は理解するが社会は偏見だらけ

カムアウトした相手が理解を示し、性的指向を隠さずに話せたり、それを前提とした会話ができたりしたときに、「受け容れられた」と感じ、それはカムアウトの「成功」を意味する。しかしながら、「成功」したと見られるカムアウトの経験にも、カムアウトする側とされる側の「理解」をめぐる認識の差が生じる場合がある。これまでの調査で出会った、子からカムアウトされた 3 人の母親は、子がカムアウトしてくれてよかった、うれしいと話していた。一方で、その子が同級生の集まりでみんなの前でカムアウトしたい、祖父母にカムアウトしたい、もしくは、就職活動の時に性的指向を隠さずに言うつもりだ、という主張に対しては、やめるように促したという。それに対して、子たちは親の「偏見」を感じ、本当の意味で自分を理解していないと、対立したという。親の立場から見れば、不特定多数の前や就職活動の時にカムアウトすることは、誹謗中傷や不採用の可能性を大きくするという「親心」からであった。また祖父母に言わない方が良いと言う背景には、祖父母の年齢のことを考えて驚かせてはいけないという祖父母への「配慮」があった。親子関係以外でも、「○○さんは偏見があるから言わない方がいいんじゃない」や、逆に「恥ずかしいことじゃないからもっとカムアウトすればよいのに」などと、カムアウトするタイミングを助言されるというケースもあるだろう。こういった発言も、発言者の立場からすると、カムアウトしてきた非異性愛者への「気遣い」や「思いやり」の気持ちからだったかもしれない。

しかし、誰に、そしてどのタイミングでカムアウトするか・しないかは本人が決めることである。非異性愛者がカムアウトしない方がいいと言われ「もやもや」するのは、その発言がまるで「非異性愛は隠しておくべき性的指向だ」と、非異性愛者を不可視化する発言とも受け取ることができるからである。見えなければ、誹謗中傷や暴力にさらされない、という見方もあるだろうが、存在を不可視化され、無化される経験は、非異性愛者の存在自体を否定するマイクロインバリデーションとして経験されることが理解できる。

他にも、非異性愛メンバーの恋人やパートナーを、親族や近所の人に「友達」として紹介したりするということも、マイクロインバリデーションに該当する。パートナーの存在と本人のアイデンティティが否定され、その関係性が無価値なものとして扱われてしまうからである。もしこれが異性のパートナーだった場合、同様の行動をするとは考え難い。むしろ、「結婚」を自慢さえするのではないだろうか。これ以外にも、非異性愛者であることを認知している人に、カップル同士で子どもをもつ意思があると伝えると、「生まれてくる子どもが差別にさらされるかもしれないから、かわいそう」といった発言をされることはある。これは一見、「子ども想いの発言」であるかのように見える。しかし、この発言者の持っている偏見を「子ども」を振りかざすことでなかったことにしつつ、同性カップルが異性カップルに比べて親として優れていないというメッセージともうかがい知れる、まさにマイクロインバリデーションである。そもそも、生まれてくる子どもを差別するのは、まぎれもなく、こういった発言の背景にある偏見である。

3.6 マイクロアグレッションを生じやすい状況とその特徴

理解をめぐる齟齬は、スー（2010=2020）が人種的マイクロアグレッションを例に挙げた葛藤の原則とも合致する。その原則の一つが、「人種的リアリティの衝突」である（Ibid: 92-7）。これは、白人と黒人では人種差別主義（レイシズム）に対する認識が異なることを指す。つまり、マイクロアグレッションを通して日常的に発せられるメッセー

ジに対する認識が、マジョリティとマイノリティとでは異なるということである。だからこそマイノリティ側は、差別に対して、マジョリティ側からすれば「過剰」に見える反応をし、強い警戒心を持つのである。一方、マジョリティ側は認識のずれ故、自身の偏見に無自覚であり続けることができる。ダイアン・J・グッドマン（Goodman 2011=2017:26）によると、ある「集団の一員であるというだけで恩恵を受け、労せずして優位性を得られる」特権集団（スーが使用する社会的マジョリティ集団と同義）は、劣位集団に比べて優位なアイデンティティをもち、それを通して特権を得ていること、その一方で劣位集団が抑圧を受け、その抑圧が維持されることでさらに自身の優位性を維持強化していることにほとんど無自覚である。なぜなら、特権集団にとって特権とは、水の中にいる魚にとっての水のように当たり前のようにあるものだからである（Ibid: 33-4）。これを、「『水の中の魚（fish in water）』現象」と言う。その結果、マジョリティ側とマイノリティ側の認識の差が生まれ、知らず知らずのうちに偏見が露呈することで、マイクロアグレッションが生じてしまうと言えるだろう。

さらに、スーが指摘する「意図的ではないバイアスの不可視化性」という原則からも、なぜ無自覚のうちに差別的な言動が表出するかも説明できる（Ibid: 98-102）。自身の偏見に無自覚であるため、受信者側がマイクロアグレッションだと認識した発信者の言動は、発信者側からすると善意の気持ちからであったと疑わない。発信者側の自身に対する認識と、受信者側からした発信者側の無自覚な言動にギャップがあり、そこからジレンマが生じるのである。人種問題の研究のおける世界の第一人者の一人として知られる、心理学者のジェニファー・エバーハード（Eberhardt 2018=2020）は、潜在的な偏見は、その人が差別主義者であるかは関係なく、その人の意識や認識、志に関わらず持たれうるものだと指摘する。つまり、わたしたちは誰一人、偏見から自由になることはできず、特にマジョリティは自身の偏見にも、それに無意識でいられる権利にさえ無自覚であるということである。

スーによれば、これら原則は非異性愛者や女性へのマイクロアグレッションの経験にも通ずるという。本節（3-1 から 3-5）で紹介した非異性愛者の日常的な差別経験は、異性愛規範が今も社会に根強く残っていることを物語る。異性愛規範社会において、異性愛の性的指向は「基準」となっているため、非異性愛者は常にカムアウトを迫られる。一方で、異性愛者にとっては、自身の特権に無自覚でいられるよう機能する。この不均衡な関係性ゆえ、非異性愛者と異性愛者との間では、異性愛規範や日常生活の中で表出されるホモフォビアに対する認識に差が生じると考えられる。そのため、「思いやり」や「気遣い」とされる言動の中に、無意識の偏見が潜んでいることが見えづらくなり、それが露呈した時に、マイクロアグレッションが生じるといえるだろう。非異性愛者の中には内面化されたホモフォビアゆえ、自身の性的指向を肯定できない人もいるように、性的指向にかかわらずすべての人が異性愛規範を内面化し生活する結果、異性愛規範は再生産され続けている。

4.「和規範」と「ふつう戦略」:「同性愛歓迎ムード」に潜むマイクロアグレッション

本節では、現代日本社会に見られる「同性愛歓迎ムード」に潜む、マイクロアグレッションの危険性について考察する。前項でも、筆者によるこれまでの研究（元山 2017; Motoyama 2019）から、カムアウトされた家族が非異性愛メンバーを受け容れたり、他者に家族の立場からカムアウトしたりする際の対応について触れたが、その際、しばしばみられるのが、「ふつう戦略」である。ふつう戦略とは、家族や当事者が、後述する「和規範」を維持することで排除されないための戦略だが、「同性愛歓迎ムード」の背景にもこの規範が見られることを確認し、その問題性を指摘していく。

カムアウトされる側は、多くの場合以前から非異性愛者に対する偏見（無意識的なものも含む）を共有しているが、カムアウト後には相手への理解を示すため、非異性愛者を再評価していく。その時によく使われる表現として、「LGBTQ+ の人もふつう」がある。この時に言われる「ふつう」とは、異性愛者と比較してさほど変わらない、という異性愛規範による規定でもあるが、それだけではない。ここでいう「ふつう」は、性的指向はちがえど、仕事をし、家庭やパートナーをもち、健康に生き、調和性を持つ、人と同じようにできる人と言う意味において規定されていた。

このように人と同じようにできる、つまり、社会の和を乱さない人が望ましく、他の人たちと同じであるべきという規範を、「和規範」と捉えることができる。実際に、カムアウトされた家族は、犯罪や自殺、アルコール依存、トランスジェンダーやひきこもりなど他の「逸脱」行為と非異性愛とを比較して、それらに比べれば性的指向が人と違うだけで逸脱していないと、非異性愛を正当化することで、受け容れていくのであった（元山 2017）。

カムアウトされた家族が非異性愛メンバーのことを周りに打ち明ける際にも、非異性愛の存在を特別視せず、会話の中に自然に紛れ込ませることを通して、非異性愛者の「ふつう」を強調する、「ふつう戦略」を使っていた（Ibid; Motoyama 2019）。このように、非異性愛の受け容れやカムアウトの際に使われるふつう戦略は、和規範を維持しつつ、非異性愛の存在を当然視させることで異性愛規範を徐々に緩和する効果があった。以下では、「同性愛歓迎ムード」を支える和規範の正体を明らかにし、それがマイクロアグレッションの加害性を助長する危険性について指摘する。

4.1 和規範に支えられる「同性愛歓迎ムード」

1 節で触れたように、同性婚や非異性愛者に対する制度的な支持を示す人の割合が徐々に増えていることから、日本では「同性愛歓迎ムード」が醸成され、非異性愛者に「寛容」であるようにも見えることはすでに確認した。しかし、「結婚の自由をすべての人に――Marriage for All Japan――」より 2020 年に発行された、「同性婚に関する意識調査」報告書[7] によると（公益社団法人 MarriageForAllJapan――結婚の自由をすべての人に編 2020）、賛成理由として「時代の流れだからあってよい」（68.4%）、「海外で認められているから、日本でもあってよい」（63.9%）、「自分には関係ないからあってよい」（50.8%）が挙げられている。さらに、同性婚の賛否の見解を変えた理由として、「社会の変化」や「風潮」をあげた回答者が多い。同調査の回答者は 40 歳から 69 歳の男女が対象とされているため、若年層の考えは反映されていない。しかし、以上の調査から示唆されるのは、同性婚支持者は、和規範ゆえに支持を示していることがうかがい知れ、非異性愛者への差別や偏見に対する問題意識ゆえの支持とは言い難い、ということである。つまり、世界も含め「みんな支持するのが主流だから」といった理由から、みんなと同じでいるために支持をする、という受動的かつ消極的な支持とも捉えることができる。

このように、「時代の流れ」や「みんながやっているから」という理由による支持は、和規範に従うことで自身が排除されないためと捉えることもできるのではないだろうか。和規範による支持者は、非異性愛者への法制度化の風向きが変われば、もしくは、自分に不利になるかもしれないと感じれば、反対に転じるかもしれない。また、「自分には関係ないから」支持するという無関心な態度は、自身のマジョリティの特権を維持することができれば賛成するという態度ともとれ、それは非対称な権力の表れであり、抑圧への加担を意味するのではないだろうか。アラン・G・ジョンソン（Johnson 2005）によると、特権集団の人は自身の特権が与える他者への影響を考えなくても良いという権利を有している、と思っているという。つまり、特権集団の人は、無関心であり続ける選択肢を有している。特権集団は「水の中の魚現象」ゆえ、自身が持つ特権に当たり前すぎて、自身のことを社会的権力や特権を持った集団の一員としての自覚を持っていない。それは、自分が受けている特権的な扱いが、他の人々の犠牲の上でなりたっていることにもほとんど気づかないことを意味する（Goodman 2011=2017: 35）。

4.2 見せかけの人権意識による支持とマイクロアグレッション

では、なぜ「水の中の魚」状態に陥ってしまう、もしくは、自身の特権に無自覚になってしまうのだろうか。社会の動きから、その理由について探ってみたい。

新ヶ江章友は、経営学に由来する「ダイバーシティ」という用語に着目し、日本社会でいかに「ダイバーシティ推進」が展開され、普及してきたかについて論じている（新ヶ江 2021）。新ヶ江によると、日本社会でダイバーシティの考え方が普及した背景には、マイノリティの人権への配慮よりも、「『多様な人材活用が社会を活性化させる』」という経営学的発想が人々の間に受け入れられていったからだという（Ibid: 37）。これは、ダイバーシティという人々の差異を取り込み、活用することによって、組織の売り上げを増大させるという発想に基づいており、人権擁護を

経済活動に従属した二次的な意味として傍流化される。新ヶ江は、電通がダイバーシティ・マーケティングとセクシュアルマイノリティの社会運動とを連動させ、「『市場化される社会運動』」を展開したことがきっかけで、2015 年以降の「『LGBT ブーム』」が引き起こされたと分析する。その市場化される社会運動で使われた戦略は、「必ずしも強い人権意識を持っているわけではない消費者としての LGBT とアライであり、アライの姿勢を示す企業」が主体となれる運動の在り方を展開した点にあった（Ibid: 49）。人権意識の強い当事者やアクティビストによる人権擁護を根幹にした従来の社会運動とは目的も方法も大きく異なる。市場化される社会運動が活発化する中で、企業のみならず、地方自治行政でも LGBTQ+ をめぐる人権施策へと広がっていったという。その結果、わたしたちは「多様性の尊重」という言葉を頻繁に耳にし、「多様性を尊重することが大切だ」といった考え方が普及してきたと言えるだろう。普及した背景には、「時代の流れ」や「みんな大切だと言っているから」という和規範も手助けしたと言えるだろう。

このように、和規範を理由とした人権擁護への姿勢、そして、経済的活動に従属した人権意識を、本稿では「見せかけの人権意識」と呼ぶ。つまり、人権擁護を経済活動に従属させ、和規範を通して二次的な意味に傍流化した結果、「見せかけの人権意識」が醸成されていったと言えるだろう。その状況下で、人権に関する議論に支持を示すことで、「自分は差別をしない、大丈夫だ」と過信できる状況が作り上げられていったのではないだろうか。それは、たとえば、同性婚に賛成することで「差別をしない善良な市民」として自己定義でき、それが「見せかけの人権意識」かもしれないという可能性には気づくこともなく、自身の無意識の偏見と向き合わずにすむ状況を生んだと言えないだろうか。以上のような社会の動きによって、「善良な市民」として「見せかけの人権意識」を持った特権集団は、ますます自身の特権に無自覚になってしまうと考えられる。

しかし、「善良な市民」であろうと、異性愛者であれば、異性愛規範が基盤となる社会やそれをもとにつくられた制度から少なからず特権を得ている。にもかかわらず、自身の異性愛者としてもつ特権に無自覚であるということは、知らず知らずに異性愛規範の再生産に加担していることを意味し、その影響力をなかったことにすることを意味する。異性愛規範が再生産されることによって、異性愛を前提とした会話や制度が温存され、非異性愛者の存在が不可視化され、その経験が無効化される。つまり、結果として、自身の特権に無自覚な「善良な市民」ほど、マイクロアグレッションを起こしやすくなるという皮肉な情況さえ出来しうることになる。さらに、「善良な市民」が「見せかけの人権意識」の上に成り立っているとすれば、みんなと同じようにすることで調和を保つことが望ましいという和規範は維持され続け、マジョリティとは異なる者を排除しつづける差別構造もまた維持と再生産されることが示唆される。

以上のことから、人と同じであることが良しとされる和規範は、「同性婚歓迎ムード」を形成し、消極的な支持者や「見せかけの人権意識」を人々に習得させるよう機能していた。ここから、和規範とマイクロアグレッションは親和性が高いこともわかる。なぜなら、和規範は自分で考えるより、ほかの人と同じようにすることに主眼が置かれており、その結果、自身の偏見が放置された状態のまま、また、問題意識を持つことのないまま同性婚を支持することで、「善良な市民」という地位が与えられ、自身のもつ特権にさらに無自覚でいることを可能にするからである。しかし、「多様性と調和」への舵切りをする社会や「同性愛歓迎ムード」が醸成される現代日本社会をマイクロアグレッション概念を通して考察していくと、そこに潜む危険性を明らかにすることができるとともに、そこに埋没する「善良な市民」が知らず知らずのうちにマイクロアグレッションの潜在的な「加害者」になることに警鐘を鳴らしていることがわかる。

ここまで、非異性愛者を支援する法制度上の動きを批判的に検討はしたが、その動きを間違いだというつもりはない。見せかけの人権が発端であったとしても、企業の取り組みや自治体での人権施策は LGBTQ+ の存在を可視化し、また、法制度化も異性愛規範を徐々に緩和する可能性をもつからである。しかし、後述するように、和規範が維持されたままでは差別はなくならない。どのようにしたら差別を低減させていけるかわたしたち一人一人が真剣に考え、行動する必要があるだろう。

5. マイクロアグレッション概念の可能性：差別の低減に向けた起点として

5.1 当事者のエンパワメント：「もやもや」の言語化

差別とは、単に、ある属性によって生じる不利益を指すものではなく、その不利益が生じていることが、別の論理によって正当化されている状態を指し、この正当化される構造を江原由美子は、差別の装置と呼んだ（江原 2021: 115-8）。そして、被差別者が常に差別が起きたことを説明する責任を負わされ、「被差別者だけが怒りを強いられる」構造に問題があることを指摘する。その「怒り」は、ある状況が「差別」だと判断されたときに生じうる感情であるが、善良な人による、差別かどうかの判断がはっきりとはつかない言動に対しては、「怒り」をどこに向けたらよいのか、そもそも「怒り」を持つことが正しいのかといった迷いを生じさせ、日々の「もやもや」として消化されることになるだろう。そうした、巧みに隠蔽され続ける不当性にスポットライトを当て、「もやもや」の原因が差別だと特定できるのが、マイクロアグレッション概念と言えるのではないだろうか。被差別者が差別の実態を証明しないといけないという不均衡な関係は維持されたままではあるが、それでも、知らず知らずのうちに侮辱されたり、劣等感を抱かされたり、存在を無効化されたりすることに抗い、自身の内面化されたホモフォビアに気づくきっかけになるなど、マイクロアグレッション概念は周縁化された人たちをエンパワメントする役割を果たす可能性を持っている。

さらに、これまで差別があからさまな嫌悪や暴力の表出だと認識されていた範疇では該当しなかった言動までも「差別」だと認識され、問題視できる点において、この概念は当事者のこれまでの被差別経験をより多角的に捉える視座になりうると考えられる。マイクロアグレッション概念を用いることによって、3 節でみてきたように、「ありふれた」生活の中で、身近な人による日常的な差別を経験していることが明らかになった。これまでも、カムアウトのしづらさやそれに伴う葛藤が異性愛規範やホモフォビアによるものであることは指摘されてきた（Altman 1993; ヴィンセントほか 1997 など）。しかし、カムアウトの意欲をそぐ環境を生産・再生産し、カムアウトすることを「エゴ」と思わせたり、カムアウトしないことがすることよりもより賢明な選択だと思わせたりすること自体、環境の中に埋め込まれたマイクロアグレッションであり、差別である。マイクロアグレッション概念は、これまで「相手に悪気はないから」と見過ごしてきた不当性を言語化し、「気にしすぎかも」という自責の念から解き放つのを助けてくれるだろう。

一方で、マイクロアグレッション概念は、受信者の被害意識を助長するといった批判や、（Campbell and Manning 2018）、発信者を加害者と名指しし、罰するコールアウト・カルチャーへとつながるため、相互作用分析を考慮すべきだという批判（Schacht 2008）がある。キャンベルらの批判自体、「差別だ」という申し立てを、「敏感になりすぎ」といって取り扱わず、差別をなかったことにするその態度は、マイクロインバリデーションとしても理解できる。また、シャハトの批判に対してスーは、発信者側と受信者側の両者の地位が非対称であることを考慮せずに、相互作用の影響を考えること自体、マイクロアグレッションの被害者を非難する構図になっていると反論する（Sue 2010=2020: 104-6）。これらのマイクロアグレッション概念への批判は、加害者／被害者という二項対立が生み出されることと、その申し立てにより人間関係が脆弱になる危険性を示唆しているとも捉えることができる。しかし、マイクロアグレッション概念は、むしろその二項対立を覆すのである。なぜなら、マイクロアグレッション概念は、たとえある属性においてマイノリティであったとしても、ほかの属性ではマジョリティになる可能性を示唆し、被害者になったから加害者にならない、もしくは、その逆に加害者は被害者にはならない、という簡単な図式を覆すよう作用するからである。

マイクロアグレッション概念は、差別とは捉えづらく、これまで見過ごされてきた抑圧と無自覚な加害性を可視化するために提唱され、その有効性は上で確認した通りである。しかし、どの言動がマイクロアグレッションかを議論するにとどまってしまえば、その言動をした人が「悪」と認定され、それ以外の言動は「悪ではない」となり、「悪ではない」言動の中の無意識の偏見や無自覚の差別は見過ごされてしまう。そこで、マイクロアグレッション概念をもう少し広義にとらえ、差別の低減に向けた建設的かつ積極的な議論と行動のための「起点」として捉えること

を提案したい。すなわち、マイクロアグレッション概念を起点とし、第一に、マジョリティが自身の特権に意識を向け、真の人権意識を培っていくこと、そして第二に、差別をより身近なものとしてとらえ、積極的に差別と向き合い、対置していけるコミュニケーションを確立していくこと、を意味する。

5.2 差別への向き合い方：和規範の見直しにむけた意識の変革とコミュニケーション

マイクロアグレッションを含む差別は、マジョリティや特権集団の価値規範から他者化・差異化されて生じる。江原は、差別を排除行為だとし、「『排除』するために必要な他者の認知は最小でよい」と指摘し、マジョリティもしくは特権集団の基準から「ちがう」と差異化されることが排除の十分条件であると唱える（江原 2021: 139）。だとすれば、マイクロアグレッションを含む差別の低減には、特権集団の人たちの意識の変革が求められる。意識を変革するためにまずは、「水の中の魚」状態に陥らないことが求められるのではないだろうか。出口は、「マジョリティ性（つまり特権性）を多くもった人たちが、自らが優遇されていることに気づかないかぎり、真の意味での変革は望めない」と断言する（出口 2021: 166）。そのうえで、マジョリティ自身が特権に気づくことで期待できる効果の一つをアライになることだとする。アライとは、「優位集団の一因でありながら、劣位集団の人たちへの差別や不公正に対して異議を唱え、行動を起こす人々のこと」であり、マジョリティの立場として特権を自覚し、アライとして社会に働きかけていくことで生きやすい社会づくりが可能だとする（Ibid: 170-1）。むろん、アライと自称し、LGBTQ+ フレンドリーを公言しているからといってマイクロアグレッションを引き起こさないとは言い切れない。もしくは、LGBTQ+ の知り合いや家族がいるからと言って、アライに「なる」わけでもない。むしろ、自身をアライだと名乗り、それゆえ差別とは無縁だと自分を信じ込ませてしまっては、マイクロアグレッションを引き起こす危険性を高めるかもしれない。また、「アライになる」とは特権集団がマイクロアグレッションを低減するための手段であって、目的ではない。大切なのは、特権集団に属することで、劣位集団よりも優位なアイデンティティを通して特権を得ていること、そして、その特権が劣位集団への社会的抑圧の犠牲の上に成り立っていることを自覚することである。そうすることで、周縁化された人々の置かれている不当な状況に問題意識を向けることにつながり、「見せかけの人権意識」ではなく、真の人権意識を培っていくことができるのではないだろうか。

その上で、マジョリティ・特権集団の基準自体の見直しが求められる。受信者側によるマイクロアグレッションへの申し立てがあった場合、その言動が差別か否かという議論にとどまるのではなく、それについて積極的な意見交換をし、低減するための自己内省と行動を起こすため、自身のもつ基準を見直していくことが求められるだろう。さらに、拙稿でも指摘した通り、日本社会における差別を低減させるためには、異性愛規範のみならず、「和」を乱さないと判断された個だけが受け容れられる和規範をぬりかえていくことが不可欠である。マジョリティ・特権集団が規定する「ふつう」の基準は常に変わりゆくものであるが、異性愛規範のみならず和規範を基準として自分たちとは異なる人・集団を常に他者化・差異化する限り、常に誰かが排除の対象となる。江原も「『差異＝悪』としてしまう社会は、同質的存在しか許さない社会であり、そうした社会では『差別』は再生産されてしまうであろう」と述べ、異質性を尊重し合う感性を育む必要性を唱える（Ibid: 126）。真の多様性尊重社会を目指すためには、和規範のような同質性による和や調和ではなく、異質性（多様性）による和や調和という価値観の浸透が必要だろう。特にグローバル時代の今だからこそ､多様性による和や調和を創造していくことが希求されているといえる。しかし、和規範や異性愛規範を含むマジョリティ・特権集団の基準は、それらの基準から「逸脱」とされ周縁化されるマイノリティも含め、すべての人々に内面化され、その再生産に加担してしまう可能性をもつ。つまり、マイノリティ当事者自身ですら、それらの規範から解放されているわけではない。

しかし、だからこそ、マイクロアグレッションを「起点」として、わたしたち一人ひとりが、差別をより身近なものとしてとらえ、積極的に差別と向き合い、対置していけるコミュニケーションを確立していくことが求められるのではないだろうか。日本では、差別について表立って話すこと自体がタブー視されているようにも見える。ある問題に対して差別だと名指しして、その問題に取り組むこと自体が、社会の調和を乱す行為、つまり和規範に反す

る行為として認識されうる。しかしながら、問題を直視しないということは、その問題への対処や根本的な原因への働きかけはなく、問題が温存されることを意味する。マイクロアグレッションとは、わたしたちが無意識的にもつ偏見が露呈したときに生じる差別であり、誰もが「加害者」になりうる可能性をもちあわせていることを教えてくれる。マイクロアグレッション概念は、差別をより身近な事柄として感じさせ、日常的に差別について話す機会を提供する手段として機能することも可能だろう。このようにマイクロアグレッション概念を本来のそれよりも広義に捉えることで、わたしたちの差別への向き合い方に大きな示唆を与える。差別を顕在化し、解決に向けたコミュニケーションを始めるためにマイクロアグレッション概念を活用することができれば、人々の属性を超えた連携が可能となり、多様性が尊重される社会づくりへとつながっていくのではないだろうか。そのために、具体的に、マイクロアグレッションの受信者と発信者側がいかにして問題意識を共有し、より対等な関係を構築するためのコミュニケーションを取るのかについて、さらなる研究を深め、未来に挑戦していきたい。

［注］

1）WHO で「性同一性障害」が「精神障害」の分類から除外されることで合意されたのは、2019 年と最近である。

2）ホモフォビア（同性愛嫌悪）とは、1973 年に心理学者のジョージ・ワインバーグ（Weinberg 1972）によって提唱された言葉であり、同性愛者に対する嫌悪感を指す。この頃、米国では同性愛者は治療の対象と認識されていたが、ワインバーグはホモフォビアという概念を通して、治療の対象となるべきは同性愛者でなく、同性愛者に嫌悪を抱く人やその社会構造であると指摘した。

3）この調査は、2018 年 10 月 1 日時点で大阪市に住民基本台帳に登録されている 18 歳～ 59 歳の 1,521,452 人の中から、無作為に抽出された 15,000 人を対象に実施された。そのうち、4,294 人の回答を基に分析された調査結果である。

4）2019 年 5 月 16 日～ 5 月 17 日、全国 20 ～ 69 歳の個人のうち有効回答者、計 347,816 名を対象にインターネット調査が行われた。

5）LGBT 総合研究所による事前調査によると、これに該当する性的指向は、同性愛、両性愛、無性愛、クエスチョニング、その他、となる。

6）2019 年 4 月 24 日～ 5 月 20 日、全国 20 ～ 69 歳の個人、計 2578 サンプルを対象に行われたインターネット調査。サンプル内における性同一性区分と性的指向区分は以下の通り。「性同一性区分」に分類されるのは、性自認が一致しているとされるシスジェンダー 520 人、X ジェンダーも含む、トランスジェンダー 520 人、計 1,044 人。さらに、「性的指向区分」に分類されるのは、異性愛者 518 人、同性愛 503 人、両性愛 517 人、計 1,538 人。

7）この調査は、インターネット調査会社の登録者を対象とし、国内に在住する 40 ～ 54 歳の男女、55 ～ 69 歳の男女の合計 1,500 名が回答するように設計され、2019 年 12 月に行われた。有効回答数は 1,495 名であり、そのうち 72.6% の人が同性婚を賛成・やや賛成としている。

［文献］

Altman, Dennis, 1993, *Homosexual: Oppression and Liberation.* New York and London: New York University Press.

BBC News Japan,「同性婚を認めないのは『違憲』　札幌地裁が初の判断」，2021 年 3 月 17 日，（2021 年 3 月 25 日取得，https://www.bbc.com/japanese/56424717）.

Campbell, Bradley and Jason Manning, 2018, *The Rise of Victimhood Culture: Microaggressions, Safe Spaces, and the New Culture Wars*, Los Angeles: Palgrave Macmillan.

出口真紀子，2021,「論点 3　みえない『特権』を可視化するダイバーシティ教育とは？」岩渕功一編『多様性との対話――ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社，165-174.

電通，2020,『LGBTQ ＋調査 2020』「News Release 電通，『LGBTQ ＋調査 2020』を実施――ストレート層を初めてグループ化し，LGBTQ ＋に対する意識／知識を分析　調査対象で最も多いのは LGBTQ ＋を知ってはいるものの自分事化できていない『知識ある他人事層』」電通ダイバーシティ・ラボ.

Eberhardt, Jennifer, 2020, *Biased: Uncovering the Hidden Prejudices that Shapes What We See, Think, and do*: Penguin Random House.

（山岡希美訳，2021，『無意識のバイアス―人はなぜ人種差別をするのか』明石書店.）
江原由美子，2021，『増補　女性解放という思想』ちくま学芸文庫.
Goodman, Diane J., 2011, *Promoting Diversity and Social Justice: Educating People from Privileged Groups (2nd Edition)*: Taylor & Francis Group.（出口真紀子監訳，田辺希久子訳，2017，『真のダイバーシティをめざして―特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』上智大学出版.）
日高康晴，2016，『LGBT 当事者の意識調査～いじめ問題と職場環境等の課題』宝塚大学看護学部.
Johnson, Allan, 2005, *The Gender Knot: Unraveling Our Patriarchal Legacy,* Philadelphia: Temple University Press.
釜野さおり・石田仁・風間孝・平森大規・吉中崇・河口和也，2020，『性的マイノリティについての意識：2019 年（第 2 回）全国調査報告会配布資料』JSPS 科研費（18H03652）「セクシュアル・マイノリティをめぐる意識の変容と施策に関する研究」（研究代表者広島修道大学河口和也）調査班編.
キム・ジヘ，2019，『선량한 차별주의자』Changbi Publishers, Inc.（ユン・イキョン訳，2021，『差別はたいてい悪意のない人がする――見えない排除に気付くための 10 章』大月書店.）
金友子，2016，「マイクロアグレッション概念の射程」，『生命学研究センター報告書［24］第二部　思考――フェミニズムをめぐる論考：理論／実践 4』立命館大学生存学研究所.
公益社団法人 MarriageForAllJapan- 結婚の自由をすべての人に編，2020，『同性婚に関する意識調査』「同性婚に関する意識調査　報告書」(https://www.marriageforall.jp/wp-content/uploads/2020/10/ 同性婚に関する意識調査報告書 _ 公刊版 .pdf)，石田仁・岩本健良・釜野さおり.
厚生労働省，2020，『令和元年度　厚生労働省委託事業　職場におけるダイバーシティ推進事業報告書』（https://www.mhlw.go.jp/content/000673032.pdf）.
LGBT 総合研究所，2019，『LGBT 意識行動調査 2019』（https://www.daiko.co.jp/dwp/wp-content/uploads/2019/11/191126_Release.pdf）.
McLelland, Mark J., 2005, *Queer Japan from the Pacific War to the Internet Age.* Lanham, Md.: Rowman & Littlefield.
元山琴菜, 2017,「日本における非異性愛をカムアウトされた家族の受け容れ方――差別への働きかけとしての〈ふつう戦略〉とその可能性」『理論と動態』(10): 24-41.
Motoyama, Kotona, 2019, "'Coming Out' as a Family with an LGB Member in Japan: Normalizing Strategies and Negotiating with Social Norms," *Contemporary Japan,* 31(2): 159-179.
Nadal, Kevin L., 2013, *That's so Gay! Microaggressions and the Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Community*, Washington DC: American Psychological Association.
Schacht, Thomas, 2008, "A Broader View of Racial Microaggression in Psychotherapy," *American Psychologist, 63 (4): 273-79.*
新ヶ江章友，2021，「ダイバーシティ推進と LGBT ／ SOGI のゆくえ――市場化される社会運動」岩渕功一『多様性との対話――ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社，36-58.
Sue, Derald Wing, 2010, *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*, New Jersey: John Wile & Sons, Inc.（マイクロアグレッション研究会訳，2020，『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』明石書店.）
ヴィンセント，キース・風間孝・河口和也，1997，『ゲイ・スタディーズ』青土社.
Weinberg, George, 1972, *Society and the Healthy Homosexual,* New York: St. Martin's Press.

もとやま　ことな　1987 年生まれ　北陸先端科学技術大学院大学　グローバルコミュニケーションセンター講師
主な著書
『あたらしい自分との出会い New Self――「自分らしさ」の発見、「多様性」の尊重、そして「協働」の実現』（共著）海象社